

# 美術と自然を融合する 新ピクチャレスク観光に関する考察

増子 美穂 東洋大学国際観光学部  
藤稿 亜矢子 東京女子大学現代教養学部

This study examines the potential of “New Picturesque Tourism,” which integrates art and nature to enhance emotional engagement and mutual understanding. In response to declining public interaction with both museums and natural environments in Japan, the research investigates how art can function as an interpretive medium to reconnect people with nature and art. Inspired by the movement of 18th-century British picturesque aesthetics, where landscape painting influenced perceptions of nature, the study conducted an experimental tour combining art appreciation and nature experience at the Morohashi Museum of Modern Art and the Goshikinuma nature trail in Bandai-Asahi National Park in Fukushima. Participants viewed European landscape paintings with expert interpretation before enjoying nature walk. Analyses of photos, questionnaires, and open-ended responses revealed that most participants experienced perceptual changes and increased interest in both art and natural landscapes. These findings suggest that integrating art and nature engagement deepens tourism experiences and that the possibility of other types of New Picturesque Tourism. The study also proposed an evaluative framework linking aesthetic appreciation and nature interpretation, contributing to future models of art-nature tourism.

キーワード：美術、自然、自然風景画、自然景観、ピクチャレスク、インタープリテーション

Keyword : Art, Nature, Landscape painting, Natural landscape, Picturesque, Interpretation

## 1. はじめに

### 1-1 研究の背景と目的

芸術と自然はいずれも不可欠な観光資源であり、観光は、双方への接触と理解の媒介として重要な手段でもある。一方、国内において芸術や自然に触れ合う機会や関与度は少ない現状がある。例えば国立アトリサーチセンター（2023）によれば、調査対象者（関東8000人）のうち、31%が美術館には全く行かない、次いで30%が4～5年に1回以下となっており、美術館離れが危惧される。また同センターが2025年に実施した若年層に対する調査では、調査対象者（関東・関西15～25歳1800人）の51.7%が美術館には全く行かない無関心層、次いで24%が年に1回未満の低関与層となっており、将来的な裾野の拡大が課題である（国立アトリサーチセンター、2025）。同様に自然との接触についても、内閣府（2024）の調査によれば、調査対象者（全国3000人）

のうち、現在自然と触れ合う機会はあまりない、ほとんどないを合わせて52%と過半数を超え、過去1年間に国立公園（自然公園）に行った回数は0回が55%、次いで1回が18%となっている。また同調査で自然と触れ合う機会についても聞いているが、18～29歳の若年層はあまりない、ほとんどないを合わせると70%と、他の年代よりもかなり高くなっており、やはり将来的な自然離れをどう回避するか課題が見える。一方、グローバルに生物多様性の損失、すなわち自然破壊が一向に食い止められない現状を受けて、現在世界では、多様な方法で2030年までに自然破壊を好転させるための“ネイチャーポジティブ”という目標が掲げられている。その実現には従来の方法論だけでは不十分とされ、とりわけ人と自然のより調和的な関係を実現するために人々に意識変化をもたらすことが重視されており、人と自然の絆を深めるさまざまな

教育やコミュニケーションプログラムが各地で模索されている（Renowden *et al.*, 2021）。こうした背景から、本研究では芸術と自然を融合する観光の方法論を検討し、芸術を介した自然への共感や絆の再構築に貢献することを目指す。

歴史を振り返ると、18世紀の英国では芸術と自然が密接に関連し、双方への接触が観光および自然への価値観醸成に相乗効果を生んでいた。その詳細については後述するが、本研究では、このような18世紀の英国で醸成された風景画と自然景観における価値観と観光行動との関係性に着目し、特に風景画に焦点を当てることから芸術の中でも美術を対象として、自然と融合する新たな観光の方法論を考察する。19世紀中頃以降の近代ツーリズムにおいては、風景画は過去のものとして捉えられ、自然鑑賞と結びつけた文脈で議論になったことは少ないが、現代においても、18世紀の英国のように美

術を通して感性的自然認識を醸成させる観光形態があり得るのではないかと、というのが本研究の問いである。現代における美術と自然の融合はまったく見当たらない、ということではなく、多様化して全国各地で展開している。例えば、越後妻有「大地の芸術祭」における農村景観と現代美術の一体化、クリスト&ジャンヌ＝クロード《アンブレラ》(1991)などのランドアートに見られる大規模な自然環境を舞台とした作品、そしてジェームズ・タレル《スカイスペース》(1974)のような光と天空を取り込むインスタレーションなどのサイトスペシフィックアートなどが代表例としてあげられる。本研究では、こうした自然地域、農村地域における大規模な美術的インスタレーション等を対象とするのではなく、風景画と自然が相互補完的に「インタープリテーション」の役割を果たすことで、双方の鑑賞体験を深め、理解と興味関心を創出することができるのではないかと、という可能性を探るものである。インタープリテーションとは、自然や文化を深く理解するための観光における教育的ガイドであるが、最も基本的な定義として「単に事実や情報を伝えるというよりは、直接体験や教材を活用して、事物や事象の背後にある意味や相互の関係性を解き明かすことを目的とする教育的な活動」(Tilden, 1957)とされる。またインタープリテーションは、訪問を楽しいものにするための情報伝達サービスでもある(Wu *et al.* 2003)。インタープリテーションを自然地域の観光に取り入れている先駆者であり、その歴史も長いアメリカ国立公園局（以下、NPS）では、「参加者それぞれが、資源に内在する意味や重要性との間に、知的、感情的なつながりを作る機会を創出するための触媒」と定義されている。NPSでは、国立公園に関連した教育プログラムの中に、著名な画家達が描いた風景画を利用して景観保護や鑑賞スキルを学ぶアクティビティも提供している(NPS, 2025)。

以上のような背景から、本研究では、

分野横断的な文献レビューとそれを元に設計した初期実験ツアーを行い、美術と自然を相互に鑑賞、体験する観光形態を「新ピクチャレスク観光」と定義して今後の可能性を考察すること、またその観光形態の評価方法を検討することを目的とする。特に、自然を鑑賞、体験する際に、美術がインタープリテーションとして効果的であるか、それによって旅行者にどのような変化があるかに着目する。

## 1-2 先行研究レビュー：18世紀英国におけるピクチャレスク

まず、本研究の背景理解に重要なキーワードであるピクチャレスクについて解説する。17世紀後半から18世紀末までの英国において、貴族の子弟が当時の文化先進国イタリアへ旅行することが流行しグランドツアー<sup>(1)</sup>と称されていた。当初、こうした貴族の旅行に英国人画家が随行して記録係や旅行記の挿絵制作者としての役割を担っていたが(Ingamells 1996; Black 2011; Sweet 2012)、産業革命が進行中の18世紀後半になると、古代・ルネサンス美術を体系的に学ぶための留学や、グランドツーリスト向けの土産品として肖像画や風景画を受注する目的でイタリアに向かう画家も目立つようになった(Egerton 1990; Sloan 1986; Ousby 1990)。その先駆者はリチャード・ウィルソンであり、他にもジョセフ・ライト・オブ・ダービー、トマス・ジョーンズ、ジョン・R・コズンズらが代表的である。彼らは、図譜・紀行の読解を織り交ぜつつ、古代遺跡、火山現象などの観察にもとづく風景表現を油彩・水彩・素描で展開した(Craske 2020; Sloan 1986)。同時に、版画市場と観光需要の拡大は「持ち帰れる景観」への需要を生み、画家のイタリア行きを経済的に支えた(Sweet 2012; Ousby 1990)。こうしたグランドツアーから英国に帰国した画家たちは、この時代の自然の見方に少なからぬ役割を演じた。とりわけ、リチャード・ウィルソンはローマで学んだ古典的構図を母国のウェールズや湖水地方へ翻訳し、英国風景

に気品ある秩序を与えたとされる(Postle and Simon, 2014)。また、グランドツアー旅行者のコレクションとして英国にもたらされたイタリア風景画、特に17世紀の画家のクロード・ロラン、ニコラ・プサン、サルヴァトーレ・ローザ、ガスパーレ・デューゲによる理想風景画は、同国において自然を愛でる際の教科書となった(Richardson, 2007)。グランドツアーを介して英国で熱狂的に支持されるようになった理想風景画は、自然そのものの価値をはかる基準ともなり、そのような理想風景画の断片を実自然景観に見出し「ピクチャレスク(絵画のような)」と呼び賛美するようになった。こうしてピクチャレスクは、18世紀後半の英国で美学的カテゴリーとして初めて提唱され(Ross, 1990)、絵画のような景観美が当時の英国では自然を観察する価値観として共有されていた。ピクチャレスクな風景を愛でる旅は、風景を発見することだけを目的とした旅行であり、ピクチャレスク観光として定着し、英国の富裕層たちは自国の国土を観察されるべき「自然」として対象化していった(今村, 2021)さらに同時代に、思想家・哲学者であったエドマンド・バークは、『崇高と美の概念の起源』(Burke, 1757)の中で、自然景観への「崇高(sublime: サブライム)」といった概念について解説し、美しさとは異なる新たな自然への美的価値観を提示した(Brady, 2008)。ここでは、「なめらかで緩やかな」な景観を「美」とし、「荒々しく不規則、急な変化」のある景観を「崇高」と位置付けているが、理想風景画のような緩やかな田園風景から、荒々しい自然景観も重視するようになった感性の変化が見てとれる(増子, 2022b)。バークが提示したこの「崇高」という自然へのまなざしは、当時のヨーロッパ中に広まり、知識人や旅行者にとって、それまで恐怖しか感じなかった山や海が新たな美の対象として脚光を集めることになった<sup>(2)</sup>。その後、ウィリアム・ギルピンは、「美」と「崇高」の価値観によって英国内のピクチャレスクな風景を切り取り、風

景画が挿入された紀行文『ワイ川と南ウェールズ地方の地域におけるピクチャレスク美の観察』*Observation on the River Wye* (Gilpin, 1782)、『湖水地方のピクチャレスク美の観察』*Observations on Lakes of Cumberland* (Gilpin, 1786) 等を出版し、鑑賞地点の選定や陰影の扱いに至るまで具体的指針を与えた。こうした流れは、ピクチャレスク観光をさらに流行させ、ガイドブックと版画の流通を媒介に、英国の上流・中産階級の旅行者および素描愛好家の間で、とりわけワイ渓谷や湖水地方の周遊が盛んとなった (Gilpin 1782; West 1778; Andrews 1989; Ousby 1990) <sup>(3)</sup>。このように、18世紀後半に新たに誕生した「崇高」という自然へのまなざしが「ピクチャレスク」の価値観に付与され、その後この流れは、19世紀初頭に大自然の崇高さや荘厳さを描いた英国ロマン主義風景画へとつながった。この時代のロマン主義的風景画の担い手としては、ジョゼフ・M・W・ターナーやジョン・コンスタブルなどが挙げられる。彼らの版画集・図版群は、実自然景観をピクチャレスクに様式化して可視化し、各地域の「鑑賞すべき自然」を規定すると同時に、そのブランド価値の向上と興味関心の喚起に貢献した。当時のガイドブック挿絵や銅版・リトグラフに見られるピクチャレスクな画面構成は、旅の視覚的な期待を訪問以前に形成し、結果として観光需要を間接的に支えるとともに、自然景観を「守るべき価値」として位置づける文化的基盤を整えていった。さらに、ロマン主義的な思想は詩人のワズワースなどによっても拡張され、自然保護運動が活発化した結果、湖水地方の自然保護区、民間保護区のナショナルトラストなどが誕生していく。このように18世紀の英国において、理想風景画の解釈は自然を観光資源化する際の拠り所となり、また自然景観に新たな美的価値を与え、その流れが自然を鑑賞する観光行動と自然保護区の成立に大きな役割を果たしたと言える (図-1)。これらは1世紀を超えての長期的な動向では

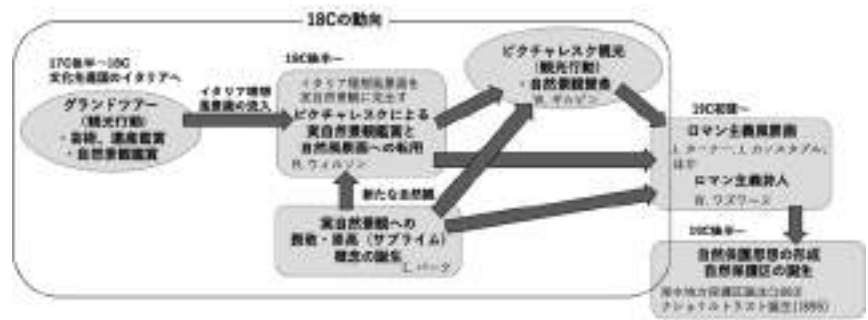


図-1 18C～19C 初頭の英国における観光行動および美術と自然景観鑑賞の関係性  
出典：筆者作成

あるが、美術と自然の相互鑑賞による好循環が生まれたことは、現代において新たな形で探求の価値があると考えられる。

## 2. 初期実験ツアーの設計と分析

美術と自然を相互鑑賞、体験する現代版の「新ピクチャレスク観光」を検討するため、初期実験ツアーを設計した。風景画と自然景観を双方向で鑑賞する観光行動としては、現在でも、18世紀後半～19世紀前半のピクチャレスク観光の流れを組んだものが存在する。顕著な事例は、アメリカにおける19世紀の代表的な風景画であるハドソンリバー派に描かれた自然景観を楽しむ「ハドソンリバー派・アートトレイル」である (図-2)。ハドソンリバー派の主宰者であったトマス・コールなどが描いた自然景観の各スポットに、屋外の解説板が設置され、当該地点を描いた風景画の複製と解説を並置している。「風景へのキャプション」として現在の眺望と風景画を比較できる自然散策となっており、風景画を自然景観鑑賞の

インタープリテーションとして使用している良い例である。本実験では、美術館と自然地域と双方の訪問インセンティブを創出することも意図し、双方の場を設けることとした。

本実験ツアーにおいても、対象とする風景画は、特に「ピクチャレスク」や「崇高」といった概念が美的鑑賞において主流であった18世紀後半～19世紀初頭の西洋風景画である。この時代の西洋風景画の構造は、物体認識を仲介する役割を果たすことが知られており、鑑賞者がそれらを見る際にキャンバスを抽象的なレベルで認識するのではなく、それが表しているもの (例えば山や海や森、塔など) を認識し、詳細な形状分析を誘発することがわかっている (Yang *et al.*, 2019) ため、これらの風景画の事前鑑賞によって、実自然鑑賞時により積極的な関わりや能動的な見方を与えると想定した。風景画によって得られた事前情報が、その後の実自然鑑賞にどのような影響を与えるか、といった研究はこれまでに見当たら



図-2 ハドソンリバー派・アートトレイルのデスティネーション例：ウェブサイトにて、左に19世紀の風景画、右に実自然景観の写真でそれぞれのトレイルが紹介されている。

出典：Hudson River School Art Trail <https://www.hudsonriverschool.org/hudsonrivervalley>

ないが、例えば、写真という形態の代理自然の効果を実証した Fránek *et al.* (2017) では、木々の風景写真を事前に見た被験者の方が、そうでない被験者よりも、その後の都市公園の自然散策において接近行動（その環境により留まろうとする行動）をとったことが明らかとなっている。この実験で使用された写真も散策ルートと同一の風景写真ではなかったが、自然の「要素」を代理自然の媒体から事前に認識すること、すなわち事前の視覚スキーマが、実自然との関係性に肯定的な変化をもたらしたことが示唆される一例である。

以上により、本実験ツアーは、1) 美術館と自然地域の双方を訪問すること、2) 専門的解説とともに風景画を事前に鑑賞するというインタープリテーションの後に自然景観を鑑賞、体験すること、を意図して設計し、図-3に示した磐梯朝日国立公園内<sup>(4)</sup>にある公益財団法人諸橋現代美術館<sup>(5)</sup>、および同公園内の特別保護地区である五色沼自然探勝路で行った。

事前調査から、当該地域は美術鑑賞と自然景観鑑賞が同時にできるため、本研究の文脈に適していると判断し、2025年6月28～29日に1回目の現地調査を実施し、実験ツアーのプロセスを設計した。さらに諸橋現代美術館では、2025年7月19日～11月9日まで、「よりみち展」という特別展覧会を実施しており、ここで18世紀～19世紀の西洋風景画の展示が含まれることから、当該期間中に実験ツアーを実施することとした。今回の実験ツアーで鑑賞した風景画は、リチャード・ウィルソン、ジョセフ・M・W・ターナー、ジョン・コンスタブルなどの18世紀後半～19世紀の英国近代風景画の先駆者たちの作品である（表-1）。

全体のプロセスは表-2の流れで進めた。美術、自然いずれの鑑賞においても、観光行動を対象とするには専門家によるものの見方ではなく、観光者となる市民レベルでの検証が重要であり、訓練や経験、専門知識を必要としない知覚体験の

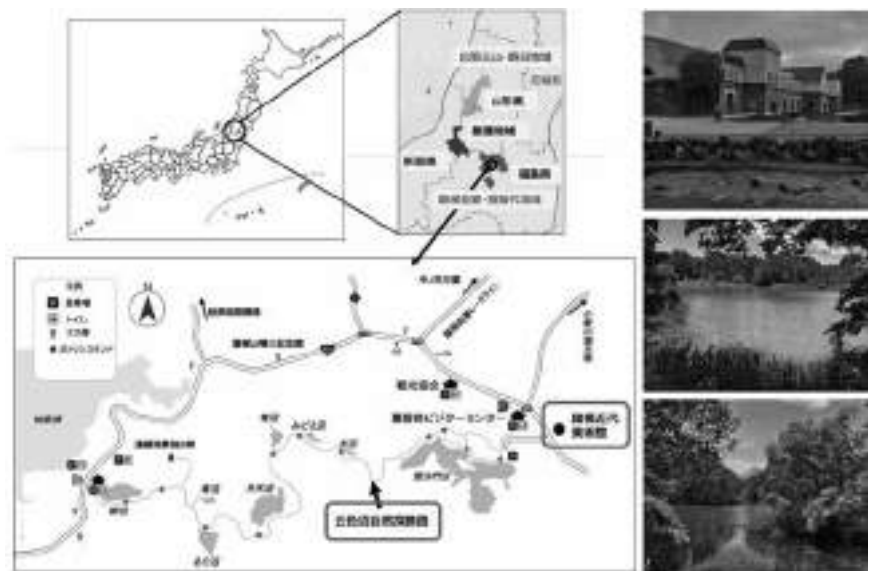


図-3 実験ツアー実施地：諸橋近代美術館（写真上）と五色沼自然探勝路（写真中・下）  
出典：裏磐梯および月山ビジターセンターを元に地図筆者作成、写真筆者撮影

方が良い (Daniel, 2001) とされることから、ツアーへの参加者は、当該対象地（美術館と自然探勝路）に訪問したことがない、また美術、美学、自然科学等の専門知識<sup>(6)</sup>を有しないものを対象とすることとし、本ツアーの概要説明を受けて参加希望を表明した都内の大学生15人となった。性別を問わず募集したが結果的に全員女性であった。美術館では美術的インタープリテーション（専門家による説明）とともに風景画を鑑賞し、それが実自然景観の感じ方や興味関心の醸成に何らかの影響があるか、を抽出した。今回は、少人数の参加者であったことから、Google Formによるアンケート調査では自由回答を多く設計し、参加者が感じたことをテキストとして収集することで定性的分析を試みた。観光におけるインタープリテーションの関連研究をレビ

ューした Zheg *et al.* (2024) を参考に、参加者の知覚、態度、行動意図の変化を検証するための設問と合わせて、本研究の意図のひとつである「芸術と自然の双方への興味関心が創出されるかどうか」についても問うこととした（表-3）<sup>(7)</sup>。回答の結果は、KH Coder を使用したテキスト分析、Excel による単純集計およびクロス集計による相関分析を行った。また、参加者が散策中に撮影した自然風景写真を収集し、自然の見方が18世紀のピクチャレスク観光のように絵画的に切り取られているかを検討するため、歴史的ピクチャレスク理論に基づいて作成した表-4の評価表によって採点し、合計点からピクチャレスク度を判定した<sup>(8)</sup>。これら一連の手法について、今後の本調査に向けてその有用性を確認することも初期実験ツアーの目的である。

表-1 鑑賞した風景画一覧

作者	作品名	制作年
リチャード・ウィルソン	アクア・アチエトーサ	1754頃
	キケロの別荘	制作年不詳
ジョセフ・M・W・ターナー	コニストンの荒地	1797頃
	ドーバー海峡	1827
	ストーンヘンジ	1829
ジョン・コンスタブル	荒野（ヒース）	1831
	水浴びをする人たち、ハムステッド	1845以前

出典：筆者作成

表-2 実験ツアーのプロセス

プロセス	方法	目的
美術館にて風景画鑑賞 (約120分) ↓	・鑑賞時に西洋美術の専門家から西洋風景画の歴史や構図、意図など、ピクチャレスクに関する解説を受ける ・その後、各自が自由に鑑賞する	・参加者自身が、西洋風景画に描かれた自然について自身の知覚による鑑賞と、インタープリテーションによる知識の双方を持って理解を深める
(翌日) 自然探勝路を散策 (約150分) ↓	・参加者各自で自由に探勝路を歩く ・散策中に写真を撮る 注) 被験者が、先入観を持って写真を撮らないように、写真分析の方法や意図は事前に伝えず、好きなように自由に撮影してもらう	・参加者自身に、実自然景観を自由に楽しんでもらい、自身が自然の中で何を感じるか、を確認する ・撮りたいと思った景色を写真に撮る
散策終了後、アンケート調査に回答撮影した全写真の収集 (約60分)	・アンケートは Google Form で作成したものを QR コードで配布、スマートフォンで回答(「感じたこと」を抽出するため、自由回答方式を中心とする) ・撮影した全写真を Google Drive にスマートフォンからアップロードしてもらう	・参加者それぞれが、美術館から自然散策のプロセスを経て、どのような自然の見方をしたか、何を感じたか、観光行動としての感想や興味関心の変化等を収集する ・被験者によって撮影された写真から視覚スキーマ(構図、遠近、光影、などピクチャレスクな視点)を抽出する

出典：筆者作成

表-3 アンケート調査の概要

属性	年齢、性別、出身地、居住地、趣味(計5問：選択式+短文記述)
美術や自然に対する見方(知覚)と態度	美術や自然に接する頻度(計2問：選択式)、本ツアーの参加前と参加後の変化(計5問：選択式+長文自由記述)
美術や自然に対する興味関心	本ツアーの参加前と参加後の変化(計7問：選択式+長文自由記述)
美術や自然に対する行動意図	本ツアー参加後の変化(計1問：長文自由記述)
その他	観光の嗜好(選択式2問)

出典：筆者作成

表-4 ピクチャレスク度評価表

番号	項目(コード名)	操作的定義・観察指標	採点規準(0-2点)	例示(代表モチーフ・構図)
1	粗野さ・多様性 (Roughness/Variety)	岩肌・樹皮・藪・起伏など、滑らかでない質感と要素の多様な併存	0 = 欠如 / 1 = 一部に認める / 2 = 画面の主要特徴	岩場+藪+倒木が同一画面に配置
2	不規則性・蛇行 (Irregularity/Serpentine)	道・川・稜線・樹列が曲線・斜線で視線を誘導	0 = 直線主体 / 1 = 部分的曲線 / 2 = 蛇行が構図を主導	くねる山道・川が奥へ導く
3	三層構成 (Foreground-Middleground-Background)	前景・中景・遠景の階層が識別可能	0 = 階層不明 / 1 = 二層相当 / 2 = 三層が明確	手前の樹枝-中景の草地-遠景の丘陵
4	フレーム効果・額縁効果 (Framing effect)	画面端の樹・岩・建造物で手前に「枠」を作る	0 = なし / 1 = 弱い枠取り / 2 = 明瞭な縁取り	画面左端の立木が視野を締める
5	部分遮蔽・広がり (Occlusion/Opening)	樹間・曲がり角等で視野を部分的に遮り、奥行きを示唆	0 = 開けすぎ / 1 = 軽度遮蔽 / 2 = 意図的な開閉が効果的	樹の間から谷がのぞく
6	典型モチーフの配置 (Motif Mix)	廃墟・橋・水面・家畜・小人物等の「絵になる」付置	0 = 該当なし / 1 = 1要素 / 2 = 複数が調和	石橋+小舟+遺構
7	大気・光の効果 (Aerial/Light Effects)	霧・曇天・逆光・薄暮など情緒を生む気象・光学効果	0 = 効果弱い / 1 = 部分的 / 2 = 画面を統御	霞む遠景・夕照の斜光
8	スケール参照 (Scale Cues)	小人物・家畜・建物等で空間量感を提示	0 = 手掛かりなし / 1 = 限定的 / 2 = 適切に配置	牧童や家畜が広がりを示す
9	非対称の均衡 (Balanced Asymmetry)	厳密な左右対称を避けつつ全体は均衡	0 = 不均衡 / 1 = やや偏り / 2 = 非対称の調和	主題を三分割点に配置
10	素材感の表出 (Texture Salience)	樹皮・岩肌・草のテクスチャが読み取れる	0 = 平板 / 1 = 一部明瞭 / 2 = 画面の読みどころ	逆光で強調された樹皮

出典：Gilpin (1782), Price (1796), Knight (1805), Andrews (1989), Rose (2016) を元に筆者作成 ※採点法：各項目0-2点(合計0-20点)

### 3. 結果

#### 3-1 ピクチャレスク度と他の因子の関係性

写真分析の対象となったのは、全写真404枚のうち、自然風景を捉えていない86枚を除いた318枚であった。まずピクチャレスク評価項目のうち、参加者の全写真で抽出された評価項目の点数を、表-4の

各項目ごとで合計した結果、全体として最も得点が高かったのは、「典型モチーフの配置」と「大気・光の効果」で、続いて「三層構成」であった。すなわち、これらが参加者の写真群に最も表出した要素であったと言える。次に、ピクチャレスク度とアンケート結果の相関性を分析した(表-5)。ピクチャレスク度は、各

参加者の最高点の写真得点と、上位3枚の写真得点の合計で算出することとしたが、全写真の点数の中央値が6点であったため、それより点数の低いものはピクチャレスク度とみなせないとしてピクチャレスク度の加点対象から外した<sup>(9)</sup>。まず、出身地や居住地、趣味などの背景要因とその他の要素について特別な相関は抽出

表-5 アンケート調査と写真分析の統合結果

参加者	ピクチャレスク度	美術への興味 (参加前)	美術に接する 頻度(参加前)	自然への興味 (参加前)	自然に接する 頻度(参加前)	自然の見方 変化	興味の変化 (美術、自然、 または両方)	今後の行動意図
A	47	○	○	○	○	○	両方	風景画鑑賞
B	26	○	○	○	△	○	自然	アートの学びと戸外活動
I	26	○	●	×	○	○	美術	描画
E	20	○	△	○	○	○	両方	自然風景撮影と鑑賞、美術知識
G	20	○	○	×	△	○	美術	風景画の比較
M	18	○	○	○	●	○	自然	自然散策
C	12	×	△	○	○	○	自然	自然鑑賞
O	12	○	○	×	△	○	自然	絵画の題材地訪問
D	12	×	未回答	○	△	○	自然	自然地訪問、自然鑑賞
H	5	○	○	○	○	○	両方	美術や自然地域の歴史
K	4	○	○	○	△	×	自然	自然公園散策
L	4	○	△	○	○	○	美術	撮影、描画の上達
N	4	○	○	×	未回答	×	×	未回答
F	3	○	○	○	○	○	自然	美術鑑賞
J	2	○	○	×	△	×	両方	未回答

注) 美術・自然への興味：◎とても興味がある○やや興味がある×どちらかというとも興味がない  
 美術・自然に接する頻度：●月2回以上○月1回以上○年に4-6回程度△年に1-3回程度  
 自然の見方変化：◎とても変わった○少し変わった×あまり変わっていない  
 出典：アンケート結果を元に筆者作成

されなかったため、表-5では割愛している。例えば、ピクチャレスク度1位の人は趣味が芸術鑑賞であったが、最下位の人も芸術鑑賞であったため、今回の実験では趣味との関連性は見出せていない。出身地や居住地にしても、当初は自然が多い地域と関係がある人は、自然への興味や自然の見方に特徴的な結果が出るかもしれない、との仮説を持っていたが、本実験では特に関連性はなかった。データ数が少ないことも起因しているかもしれない。また今回の参加者は「自然風景画と自然散策を同時に味わえるツアー」としての紹介を見て参加しているため、結果的にもともと美術あるいは自然に興味のある人がほとんどであり、特に普段から美術と接する頻度（美術館の訪問頻度）が高く、1名が月2回以上、7名が月1回以上となっていた。自然については美術よりは接する頻度（訪問する頻度）が低く、近隣の雑木林や里山なども自然に含むとしていたが、月2回以上が1名、月1回が1名で、あとはそれ以下であっ

た。  
 一方、美術への興味および接する頻度が高い人すべてが写真のピクチャレスク度が高いわけではなく、同様に、自然への興味がある方がピクチャレスク度が高いとも言えない結果であったが、ピクチャレスク度が高い上位者はすべて美術にとっても興味がある人で、また風景画鑑賞後に自然の見方が変わったと回答している。特徴的な傾向としては、もともと自然にあまり興味の無い人は、本ツアー参加後も自然への興味が創出されていないこと（参加者I、G、N）、同様にもともと美術にあまり興味の無い人は美術への興味が創出されていないこと（参加者C、D）が見られるが、一方で、もともと自然に興味はなかったが本ツアー参加後に興味が創出された人もいた（参加者O、J）。全体としても1名を除いて参加者全員が、本ツアー参加後に「これまで以上に」美術、または自然、あるいは美術と自然の両方に興味・関心が湧いたと回答している。また、風景画鑑賞後に自然散

策を行った際に、自分自身で「自然の見方の変化」を感じたかについては、3名を除く12名が変化があった、と回答している。さらに、今後の行動意図においては、2名を除く全員が何らかの意向を示しており、6名が美術・人文系の行動（風景画鑑賞、美術鑑賞、絵を描くこと、写真撮影、歴史を学ぶなど）、7名が自然地域での行動（戸外活動、自然風景鑑賞、自然散策等）と回答している。これらの興味の変化、自然の見方の変化、行動意図等については、次節でも後述する。

### 3-2 自由記述から見る傾向

次に、「風景画の専門的な解説を聞いた後の自然の見方の変化」、および「風景画と実自然の双方を鑑賞した後の興味・関心の変化」について、それぞれの自由回答の全文テキストから傾向を抽出した結果を図-4、図-5に示す。これらの図に示された共起ネットワークは、全文テキストで頻出する語において出現パターンが似ている用語の結びつきと、その結び



4. 考察

4-1. 新ピクチャレスク観光の可能性について

今回の初期実験ツアーでは、参加人数が少ないこと、参加者が全員女性であったこと、年代に偏りがあったことなど、データの数と質に課題があったため、一般的な理論を導けるような結果は出せていないが、美術と自然を相互に鑑賞、体験する新ピクチャレスク観光の形態のひとつを示すことが出来た。またデータ数は少ないものの、自由回答による定性的分析によって、美術と自然を相互鑑賞、体験した観光形態によって、自然の見方に変化が認められたこと、あるいは美術や自然に新たな興味関心が創出されたこと、また美術の知識を更に学びたい、自然地域をもっと訪問したい、などの行動意図を創出したことなどが確認された。このことは、美術と自然を相互に体験した観光形態が、双方へのより積極的な関心と行動を創出する可能性があることを示唆している。一方で、自然に興味があってもともと美術にあまり興味がない人は、今回のツアー後でも美術への興味・関心はあまり醸成されていなかった。つまり、美術的インタープリテーション→自然散策というプロセスによって、美術に興味がない人にとっては新たな美術への興味は醸成されなかったと言える。これは、自然的インタープリテーション→美術鑑賞というプロセスであったら結果は違っていたのか、あるいは自然に強い興味がある人は美術に関心を持ちにくいのか、など新たな問いを生んだ。また、今回のツアーでは、美術にも自然にも興味のない人は参加していなかったため、もともとこの双方に興味のない人が、二つを組み合わせることによって参加意欲が創出されるかどうか、また参加した場合に、そうした人々が美術や自然、あるいはその双方に興味を持つに至るかどうか、ということも今後の検証課題である。

一般的に認知学や心理学などの学術的な研究においては、トップダウン（知識→知覚への影響）とボトムアップ（知覚

→知識への影響）の効果を別々に論じていることが多いが、観光のような実社会での体験においては、両者を効果的に組み合わせることが重要と考えられる。例えば、Urry (2002) は、既存のイメージや知識に観光者の知覚は方向づけられると論じているが、これはトップダウンアプローチについての言及であり、また Agapito *et al.* (2014) は、五感を統合した観光体験そのものがマーケティングの鍵であるとしており、これはボトムアップアプローチの言及である。筆者らは、この双方を組み合わせることが観光体験のデザインに効果的と考えているが、はじめに紹介した Tilden (1957) のインタープリテーション理論も、知識による意味づけ（トップダウン）と現場体験による知覚（ボトムアップ）を結びつけることの重要性を説いている。美術と自然の融合において、知識と知覚の統合は、さまざまな形態が考えられる。実際の観光地においては、本実験ツアーのように美術館と自然地域（自然公園等）が同時に体験できるような場所は多くはないため、他の観光形態として例えば表-6のようなケースも考えられる。具体的な観光

デザインの例として、表-6中のAのケースでは、浮世絵を専門的な解説つきで美術館で鑑賞したのちに、後日そこで描かれていた自然地域を訪問するなどのツアーや、Bに近い形態であれば、浮世絵の解説つきガイドブックで事前知識を提供してから、その自然地域（あるいは似た自然風景の地域）を訪問するツアーなどもあるだろう。またCの形態においては、自然の専門的解説として各国立公園に設置されているビジターセンターの利用も考えられる。このように、これまでバラバラに訪問していた美術と自然に関連する場所をつなぐことも、新たな観光形態としての可能性がある。

4-2. 新ピクチャレスク観光の評価方法について

写真という技術が出現する前の18世紀の英国における風景画は、現代におけるSNS上の映え写真と共通の意味を持つと考えられるが、このような現代のSNS写真を視覚的に分析する手法は多岐にわたっており、各研究者が探究的に設計している段階で確立されているわけではない (Falton, 2014)。そうした背景からも、

表-6 美術と自然を相互に鑑賞、体験する新ピクチャレスク観光形態の例

観光形態	想定される効果（要検証）
A. 風景画を美術的解説つきで鑑賞（美術館ではなく教室なども可）→描かれている自然地域を訪問して鑑賞 *アメリカ国立公園でしばしば実施されている形態	美術の知識によって自然の知覚体験がより付加価値の高いものとなる、また双方への興味・関心が醸成される
B. 絵画による美術的解説つきガイドブック→その風景に近い自然地域を訪問（描かれている場所でも良い） *本実験ツアーに類似したプロセスで美術館訪問を冊子媒体で代用する形態	美術の知識によって自然の知覚体験がより付加価値の高いものとなる、また双方への興味・関心が醸成される
C. 自然の専門的解説とともに自然鑑賞→自然風景を表現した美術を鑑賞 *実自然を知識と知覚で体験した上で、美術も鑑賞する形態	自然の知識と知覚によって美術の知覚体験がより付加価値の高いものとなる、また双方への興味関心が醸成される
D. 美術館で解説なしで風景画鑑賞→自然的解説とともに自然鑑賞・体験 *絵画鑑賞を知覚体験として自由に楽しんだ後に自然の知識を得る形態	美術の知覚体験によって自然の知覚がより付加価値の高いものとなり自然への知識意欲が増す、また双方への興味関心がより醸成される
E. 自然鑑賞・体験→自然風景を表現した絵画を美術的解説とともに鑑賞 *自然鑑賞を知覚体験として自由に楽しんだ後に美術の知識を得る形態	自然の知覚体験によって美術の知覚がより付加価値の高いものとなり美術への知識意欲が増す、また双方への興味関心がより醸成される

出典：筆者作成

今回の初期実験で開発した写真分析手法は、新たな方法をひとつ提示したものと言える。また、写真分析法もアンケート調査法もその再現性については確認できたため、今後の本調査に用いる予定である。一方、前述のようにデータの数と質に課題があったため、データ数を増やしていくが、その場合は多変量解析などの統計的分析を導入するほか、自由回答の計量テキスト分析を行うことを検討する。今後、いくつかの事例と同様の手法を用いることで、評価方法の信頼性も高まっていくと考えている。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費24K15522の助成を受けて遂行されました。

本研究の遂行にあたり、諸橋近代美術館館長・諸橋英二様、学芸課長・大野方子様、主任学芸員・齊藤まりご様には、資料閲覧や調査の機会をはじめ、貴重なご助言とご教示をいただきました。ここに心より感謝申し上げます。

## 注

- (1)「グランドツアー」という言葉は、貴族の子弟に同行していた家庭教師の一人リチャード・ラッセルズがその著書『イタリア旅行』(1670)の中で初めて用いたものとされる。グランドツアーは、主に貴族の子弟が教育の仕上げとして比較的長い期間イタリアに行く修学旅行を意味し、島国である英国で国際的に通用するジェントルマン(紳士)を養成するために不可欠とされていた(増子、2022a)。
- (2)さらに同時代の思想家ユーヴェイル・プライスも「美」と「崇高」の異なる美的価値を用いてピクチャレスクを論じている(Price、1796)。
- (3)1780年代以降のピクチャレスクによる英国国内観光資源の探索、という流れについては、湊(1999)、相澤(2004)、橋本(2007)、安藤(2022)などが詳しく

いので参照されたい。

- (4)磐梯朝日国立公園は、出羽三山、朝日連峰、飯豊連峰、吾妻連峰、磐梯山、猪苗代湖までの広大な範囲に及び、磐梯吾妻・猪苗代地域、出羽三山・朝日地域、飯豊地域の3つの地域から成り立っている。陸域では我が国で3番目に大きな国立公園である。実験地となった五色沼自然探勝路がある磐梯吾妻・猪苗代地域では、火山活動によって形成された磐梯山、吾妻連峰、安達太良山がそびえ立ち、特に繰り返し噴火を起こした磐梯山の岩なだれが河川を堰き止めたことで、猪苗代湖や松原湖など大小300あまりの湖沼群が形成されている(環境省、2025)。そのうち五色沼は、磐梯山が1888年に水蒸気噴火を起こした際に、長瀬川とその支流を堰き止めたことで形成された大小30あまり湖沼の総称で、沼ごとに異なった成分を含む水質が青や緑などの様々な色の水を呈しており、その美しい湖沼群に沿って片道約4kmの五色沼自然探勝路が整備されている(裏磐梯ビジターセンター、2025)。
- (5)諸橋近代美術館は五色沼自然探勝路から近い位置にあり、約2000m<sup>2</sup>の面積に中世のドイツ風の建築をイメージして建てられた。主要コレクションであるサルバトーレ・ダリの所蔵数はアジア随一で、インバウンドを含め、当該国立公園を訪れる観光客が立ち寄り場所となっている。
- (6)それぞれの分野の専門知識を有しないというのは、教養・趣味レベルで美術や自然に触れていることは排除しない。
- (7)さらに、知覚体験は、社会的、文化的、歴史的な文脈に深く根ざしており過去の経験、教育、文化的背景の影響を受けない純粋な知覚として語ることはできない(Redies、2015; Yang *et al.*、2019)ことから、こうした外部要因はアンケート項目の属性で抽出し、美術・自然鑑賞への影響を判断することとした。

(8)構図・形式分析については、Rose(2016)に依拠し、画面内の構図、視線誘導、前中後景の配列や光の状態を記述し、形式的特徴を抽出した。

(9)ピクチャレスク度に加点する写真を3枚とした理由は、最も撮影数の少ない参加者の写真枚数が3枚であったことによる。また、各参加者の1枚ずつの写真得点の最高点が16点(1枚)、最低点が2点(1枚)であったため、中央値6点を基準としてそれより低いものは排除した得点を合計し、ピクチャレスク度とした。なお、表-6に示したこの採点法による順位は、各被験者の写真の最高点による順位、および各被験者の上位3枚(中央値より低いものも含む)の合計点による順位と同じとなっていた。すなわち、ピクチャレスク度が高い写真を撮っている人は、他の写真も相対的にピクチャレスクである(またその逆も同様)ということが示唆され、本ピクチャレスク度に一定の信頼があると考えられる。

(10)しかし、自然の見方に美術的な知識が付与されたこれらの全員がピクチャレスク度が高いわけではなかったため、写真は個人個人の撮影技術に左右されたところもあると推測される。

## 参考文献

- ・相澤興一(2004)「Picturesque について」県立シーボルト大学国際情報学部紀要、第5号 pp.1-13
- ・安藤潔(2022)『イギリス・ロマン派と英国旅行文化』関東学院大学出版会
- ・今村隆男(2021)『ピクチャレスクとイギリス近代』音羽書房鶴見書店
- ・裏磐梯ビジターセンター(2025)裏磐梯の魅力、五色沼湖沼群について [https://urabandai-vc.jp/attractive/goshiki\\_explanation/](https://urabandai-vc.jp/attractive/goshiki_explanation/) (2025/09/10アクセス)
- ・環境省(2025)日本の国立公園、磐梯朝日国立公園 <https://www.env.go.jp/park/bandai/index.html>

- (2025/09/10アクセス)
- ・ 国立アトリサーチセンター (2023) 美術館に関する意識調査(関東エリア) 2022年度調査報告書、独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター、社会連携推進グループ
  - ・ 国立アトリサーチセンター (2025) 若年層における美術やアート全般に対する意識調査、独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター、社会連携推進グループ .[https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/socialcooperation/awarenesssurveys/surveyfindings/post2025-2622.html?utm\\_source=chatgpt.com](https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/socialcooperation/awarenesssurveys/surveyfindings/post2025-2622.html?utm_source=chatgpt.com) (2025/10/05アクセス)
  - ・ 内閣府 (2024) 国立公園に関する世論調査の概要、内閣府政府広報室、[https://survey.gov-online.go.jp/202410/r06/r06-kouen/gairyaku.pdf?utm\\_source=chatgpt.com](https://survey.gov-online.go.jp/202410/r06/r06-kouen/gairyaku.pdf?utm_source=chatgpt.com) (2025/10/05アクセス)
  - ・ 橋本俊哉 (2007) 「英国18世紀後半における自然地域を舞台とした観光の展開過程-ワイ川下流地域を題材として」立教大学観光学部紀要、第9号 pp.27-36
  - ・ 増子美穂 (2022a) 「グランドツアーとギリシャ考古学」ペディアラヴィウム会紀要第77号 pp3-27
  - ・ 増子美穂 (2022b) 「『ピクチャレスク』と観光についての一考察」、日本国際観光学会自由論集 Vol.6、pp51-57
  - ・ 湊典子 (1999) 「グランド・ツアーと英国風景画」『イギリス学への招待』明現社
  - ・ Agapito, D., Valle, P., and Mendes, J. (2014) “The sensory dimension of tourist experiences Capturing meaningful sensory-informed themes in Southwest Portugal.” *Tourism Management*, Vol 42, pp224-237
  - ・ Andrews, M. (1989) *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and tourism in Britain, 1715-1800*, Aldershot: Scolar press.
  - ・ Black, J. (2011) *The British Abroad- The Grand Tour in the Eighteenth Century*, The History Press, Gloucestershire.
  - ・ Brady, E. (2008) “The sublime in contemporary aesthetics.” In A. Sigurjonsdottir (Eds.) *Dreams of the sublime and nowhere in contemporary Icelandic art*. Brussels and Reykjavik: Bozar.
  - ・ Burke, E. (1757) *A Philosophical Enquiry into the origin of our ideas of the Sublime and Beautiful*, London, R and J.Dodsley
  - ・ Craske, M. (2020). *Joseph Wright of Derby: Painter of darkness*. New Haven: Yale University Press.
  - ・ Daniel, T. C. (2001) “Whither scenic beauty? Visual landscape quality assessment in the 21st century”. *Landscape and Urban Planning*, 54 (1-4):267-281. [https://doi.org/10.1016/S0169-2046\(01\)00141-4](https://doi.org/10.1016/S0169-2046(01)00141-4)
  - ・ Egerton, J. (1990) *Wright of Derby* (Exhibition catalog). London: Tate Gallery.
  - ・ Fälton, E.(2024) “The romantic tourist gaze on Swedish national parks: tracing ways of seeing the non-human world through representations in tourists’ Instagram posts”, *Tourism Recreation Research*, 49:2, 235-258, DOI: 10.1080/02508281.2021.1984692
  - ・ Frane`k, M. and Režný, L. (2017) “The Effect of Priming with Photographs of Environmental Settings on Walking Speed in an Outdoor Environment.” *Frontiers in Psychology*. 8:73.doi: 10.3389/fpsyg.2017.00073
  - ・ Gilpin, W. (1782). *Observations on the River Wye, and several parts of South Wales, &c. relative chiefly to picturesque beauty; made in the summer of the year 1770*. London
  - ・ Gilpin, W. (1786) *Observations, relative chiefly to picturesque beauty, made in the year 1772, on several parts of England; particularly the mountains, and lakes of Cumberland, and Westmoreland* (Vols. 1-2). London.
  - ・ Ingamells, J. (1996) “Discovering Italy: British Travellers in the Eighteenth Century,” *Grand Tour- The Lure of Italy on the Eighteenth Century*, Tate Gallery Publishing, London.
  - ・ Knight, R.P. (1805) *An Analytical Inquiry into the Principles of Taste*. London: Luke Hansard.
  - ・ NPS (National Park Service) (2025) “Teaching with Museum Collections, Making a Scene: How Landscape Artists Contributed to the Establishment of the National Park System”. <https://www.nps.gov/museum/tmc/landscapeart/lesson1.html#supplemental> (2025/09/30アクセス)
  - ・ Ousby, I. (1990) *The Englishman’s England. Taste, Travel and the Rise of Tourism*, Cambridge University Press, Cambridge.
  - ・ Postle, M. and Simon, R.(2014) *Richard Wilson and the Transformation of European Landscape Painting*, Yale Center for British Art / Amgueddfa Cymru.
  - ・ Price, U. (1796) *An Essay on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful; and, on the Use of Studying Pictures, for the Purpose of Improving Real Landscape*. New ed., with considerable additions. London.
  - ・ Redies, C.(2015). “Combining universal beauty and cultural context in a unifying model of visual aesthetic experience”. *Front. Hum. Neurosci.* 9:218. doi: 10.3389/fnhum.2015.00218
  - ・ Renowden, C., Beer, T., and Mata, L. (2022) “Exploring integrated ArtScience experiences to foster nature connectedness through head, heart and hand”. *People and Nature*,

- vol 4, pp519-533
- Richardson, T. (2007) *The Arcadian Friends*, Bantam Press, London
  - Rose, G. (2016). *Visual Methodologies* (4th ed.), SAGE Publications Ltd.
  - Ross, S.A. (1990) "Book review of Malcolm Andrews' The search for the picturesque: Landscape aesthetics and tourism in Britain, 1760-1880", *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 48(3), 248-250
  - Sloan, K. (1986) *Alexander and John Robert Cozens: Poetry of Landscape*, Yale University Press.
  - Sweet, (2012) *Cities and the Grand Tour-The British in Italy, c.1690-1820*. Cambridge University press, 2012.
  - Tilden, F. (1957) *Interpreting our heritage*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press
  - Urry, J. (2002) *The Tourist Gaze-Second Edition*, Sage Publications, London.
  - West, T. (1778) *A Guide to the Lakes*. London:Rochardson and Urquhart.
  - Wu, B., Gao, X., Deng, B. (2003) "Domestic and Foreign Research Review on Environmental Interpretation". *Prog. Geogr.* 22, pp326-334
  - Yang, T., Silveira, S., Formuli, A., Paolini, M., Pöppel, E., Sander, T., and Bao, Y. (2019) "Aesthetic Experiences Across Cultures: Neural Correlates When Viewing Traditional Eastern or Western Landscape Paintings." *Frontiers in Psychology*. 10:798. doi: 10.3389/fpsyg.2019.00798
  - Zheng, S., Zhu, L., Weng, L., and Gu, X. (2024) "The More Advanced, the Better? A Comparative Analysis of Interpretation Effectiveness of Different Media on Environmental Education in a Global Geopark". *Land* vol 13, <https://doi.org/10.3390/land13122005>